南北市糴（なんぼくしてき）

発行／長崎県教育庁長崎県埋蔵文化財センター
〒811-5322 長崎県壱岐市芦辺町深江鶴亀触515-1
TEL：0920-45-4080　FAX：0920-45-4082
URL:http//www.nagasaki-maibun.jp/
創刊号 平成23年２月

1

2

3

さらなる交流をめざしたい

～情報誌発行にあたって～

所長　**川久保 芳洋**

この情報誌のタイトルは、「南北市糴（なんぼくしてき）」。

これは、中国の歴史書、魏志倭人伝の中に記された対馬国、一支国（いきこく）の、海を隔てた交易・交流を表わす有名な言葉です。

その交易・交流を如実に示す遺跡が、国指定の特別史跡「原（はる）の辻（つじ）遺跡」です。その遺跡がある壱岐市に、昨年（平成22年）１月、長崎県は埋蔵文化財センターを設置しました。

建物は、壱岐市立一支国博物館と併設で、原の辻遺跡を見渡す小高い山の上にあります。

ここで、県内の埋蔵文化財保護行政、すなわち、遺跡の発掘調査研究や普及啓発活動などを行っていきます。

◇　　◇

壱岐だけでなく、長崎県の歴史を語るとき、東アジア地域との交易・交流の歴史を抜きにしては語れません。

地理的に大陸と近い位置にある長崎県には、人やもの、最新の技術といったものに留まらず、様々な文化が行き来する歴史がありました。県内の遺跡からは中国や朝鮮半島といった東アジア地域の遺物が出土しており、また、近隣の福岡県や佐賀県などからも、類似の遺物が出土しています。

先般、こうした国内外の関係者が一堂に会して、「東アジア国際シンポジウム」を開催し、「はるかなる魏志倭人伝の道」をテーマに交流について語り合いました。

これからも、埋蔵文化財センターが壱岐にあることを活かしながら、埋蔵文化財の研究を通して、東アジア地域との交流を続けていきたいと考えています。

この情報誌が、その一助になれば幸いです。

平成22年度　原の辻遺跡発掘調査から

1. 原地区で旧石器時代（約20,000年前）の石器の集中分布を発見。
2. 原地区で弥生時代の子どものお墓を発見。全長47㎝、最大幅23㎝。
3. 原地区で弥生時代の一支国を守るための濠を発見。深さ0.8m。
4. 猛暑の中、職場体験学習で壱岐市立田河中学校の生徒が発掘体験をしました。

4

色々と謎の多い滑石製石鍋ですが、実は何のために作られたのかよくわかっていません。出土品の多くは使用痕からみて煮炊き具として使われた様ではありますが、富と権力の集中する場所からの出土が目立つのであれば、それらは庶民とは少し離れた存在なのかもしれません。

私たちが石鍋と聞くと、韓国料理の石焼きビビンバを想像するところですが、中世のいくつかの文献からは煮炊き具としての石鍋の記述が発見されています。平安時代後期に編纂された『類聚雑要抄巻四』には、煎蜜や甘葛煎を用いた料理に使われたとあります。甘葛煎とは、黒砂糖がもたらされる室町時代初期までの国産甘味料のことです。また、鎌倉時代末に編纂された『厨事類記』によると、署預粥と呼ばれる芋粥の調理にも使われたようです。この署預粥（芋粥）とは、石鍋を使い芋を甘葛煎で煮たもので、宴席でふるまわれる高級デザートのようなものでした。芥川龍之介の短編『芋粥』はこの署預粥を題材としており、五位の侍がそれを飽きるまで食べたいと言ったところにその甘さとおいしさがうかがえます。そのほか、室町時代後期編纂の『武家調味故実』に鴫肉の料理に使われたとありますが、登場する石鍋のいずれにも絵図の紹介はなく、これらが滑石製石鍋を指すのかどうかはわかりません。

そもそもこの石鍋という名称ですが、もとは土器羽釜の影響を受け鍔が巡るこの形状は

（右ページ下段へ）

の工房の様子を留めています。職人達が何を思いながら危険をかえりみず岩壁に挑み苦労して重い石の塊を山中から運び出したか、工房に一歩足を踏み入れると当時の彼らの息吹が伝わってくるようです。

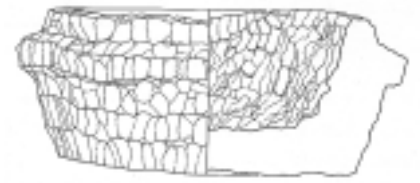

図３

図２

実測図　西彼町教育委員会「下茅場遺跡」『西彼町文化財調査報告書第１集』1998

注　鈴木康之氏は「草戸千軒町遺跡出土の滑石製石鍋」の考察のなかで、草戸千軒町遺跡から出土している石鍋の半数以上に煮沸痕または何らかの使用痕が認められることから、集落内で使用されたと見なすのが妥当としている。

【主要参考文献】
長崎県大瀬戸町教育委員会「大瀬戸町石鍋製作所遺跡」『大瀬戸町文化財調査報告書第１集』1980
下川達彌「生活を変えた職人たち」『中世の風景を読む７』新人物往来社 1995
木戸雅寿「石鍋の生産と流通について」『中近世土器の基礎研究Ⅸ』日本中世土器研究会 1993
朝岡康二「鍋・釜」『ものと人間の文化史72』1993
広島県立歴史博物館「草戸千軒町遺跡出土の滑石製石鍋」『草戸千軒町遺跡調査研究報告２』1998

■河合恭典（かわいきょうすけ）　平成21年11月から文化財調査員として県内の発掘調査に従事。これまでに関西で調査に携わってきた。趣味無し、好きな物は野菜と近世土器。兵庫県出身

センターの主役たち

【第１回】片多（かたた） 雅樹（まさき）（36歳）

平成21年４月、長崎県教育庁文化財保護主事として採用。専門は保存科学。癒されるものは木漏れ日とビール。福岡県出身

◆センターには、木製品及び金属製品の保存処理室のほか、精密分析室、撮影室などがあり、PEG 含浸装置、真空凍結乾燥機、脱塩処理装置、蛍光エックス線分析装置など設備は充実している。今後これをどう活用していくかが課題であり、楽しみでもある。

『遺跡から出土した遺物は、病気にかかっているようなもの。どういう健康状態かをしっかり把握して治療してやることが大事です。』長崎県埋蔵文化財センター調査課文化財保護主事片多雅樹はそう語る。センターの調査課には、「保存処理」のセクションがある。発掘によって出土した遺物、特に木製品や金属製品を永く後世に残し、展示など活用できるように様々な「処理」を行うのが「保存処理」である。『木製品は、まず、水につけて仮保管します。』そう片多は説明するが、素人には「水につける」というのが不思議である。水につければ腐ってしまうのでは・・・、と思うのだが、そうではないらしい。『木製品は、湿地などで水につかった状態で長い間、眠っていました。それが発掘され、空気に触れると、すぐに乾燥し、ぼろぼろになってしまいます。そうなると保存できません。』水につけて仮保管した後、科学的な処理を行うが、博物館に展示してある遺物は、こうした保存処理を経ているのである。この処理を行う前段階として、遺物の状態を調べる必要がある。それを行う所が精密分析室である。レントゲン撮影装置や高性能の顕微鏡など、センターの機器類はかなり充実している。埋蔵文化財に留まらず、広く文化財の保存活用にも応用できるほどである。片多は、大学で保存科学を学び、福岡市埋蔵文化財センターで経験を積んで、このセンターにやって来た。センターが誇る充実した機器の活用に力を発揮できる専門家である。

日々の業務のほかに、市民講座など、普及活動にも積極的に取り組んでいる。「今後の夢は」の問いかけに、『最新の機器で一級品の資料を扱えることを光栄に感じています。資料の保存処理や分析を通して、壱岐や長崎県のみならず北部九州、東アジアを視野に入れ原の辻遺跡をはじめとする本県の遺跡・遺物のすばらしさを PR していきたい』と目を輝かせて答えた。

ながさき歴史百景 1

断崖の工房『ホゲット石鍋製作遺跡』

文化財調査員　河合　恭典

『ホゲット石鍋製作遺跡』なんとなくかわいげのある響きです。長崎県の中央部、東は大村湾、西は角力灘に挟まれた西彼杵半島。標高120メートルの険しい山中にその石鍋製作工房跡はあります。爪で引っ掻いた程度で傷がつくやわらかな滑石からなる岩盤は規模の大きい場所で幅60メートル、高さ8メートルにも及びますが、その岩壁に直接ノミを入れ鍋の大まかな原型を彫りだすのである！

ホゲットという名の語源については、九州の方言で穴があくことを「ほげる」、「ほげとる」と言いますが、岩壁にノミを入れる採掘行動がもとになっていると考えられています。製作途中で放棄され壁に貼り付いたままの半球型の石鍋の粗型も多く（図1）、後世に偶然発見した人が「実のなる壁」、「壁のへそ」などと思ったかどうかは定かではありません。

11世紀から12世紀（平安時代後期）に作られた石鍋は口縁部の四方に長方形の把手が付くもので（図2）、これらは全国の出土状況からみて本州ではほとんど例がなく、九州一円を目的として作られたとみられます。12世紀に入ると石鍋の形状は変化し、長方形の把手がなくなり口縁部の直下に鍔が巡る形状になります（図3）。これは畿内で多くみられる土器羽釜の影響によるものと考えられますが、鎌倉時代に入ると本州に大量に運ばれるようになります。生産地を擁する九州はもちろんですが、最も石鍋が流通した当時に幕府の置かれた鎌倉、最も人や権力、経済が集中した京とその一円、鎌倉時代から室町時代にかけて商業・金融業・手工業など活発な経済活動で栄えた広島県の草戸千軒町遺跡に出土が集中します（注）。

まさに釜です。なぜ石鍋と呼ばれるようになったのかは定かではありませんが、では「釜」と「鍋」の用途の差はどこにあるのでしょうか。朝岡康二氏は著書のなかで「食物調理において、煮る・煎る・焼く・炒める・その他には鍋を用いるが、これに対して湯通し・ゆがく・茹でるなどの場合には釜を使用する。釜の使用にあたってはまず湯を沸かす必要があり、このことから本来の機能は湯を沸かすことにあったと考えることができる」としています。そして釜は古来より湯立て神事や盟神探湯、鳴釜神事など様々な祭祀の場において湯を沸かす道具として用いられました。つまり湯というものは生活に密着するものであると同時に非常に神聖なものであったのです。金属の鍋や釜は大変貴重なため主に土器で湯沸かしや調理を行っていた時代、濁りのないクリアな湯を手に入れることは非常に困難だったと想像できます。金属器以外でそれを可能にした滑石製の器の登場は画期的であり、形状だけでなく需要の面からも釜として扱われ重宝されたのではないでしょうか。

『ホゲット石鍋製作遺跡』は昭和56年、国史跡に指定されました。岩盤に残る生々しいノミ跡や鍋の粗型、うち捨てられた失敗作品など、現在でも中世当時

図1　岩盤から削り出された粗型

ツルが舞い降りる遺跡

—壱岐・原の辻遺跡—

東アジア考古学研究室長　安楽　勉

遺跡を歩く

私が壱岐に最初に赴任してから長い年月が経過している。その間ひたすらに原の辻遺跡の調査や保存、それに伴う啓発活動に携わってきた。それこそ暑い日も、寒い日もである。なかでも壱岐の冬はとりわけ寒い。高い山がないせいか、対馬海峡から吹く北西の風は強烈で“大陸の風”と呼んでいる。しかし、立春を過ぎるとなんとなく春めいてくる。そうなると心待ちにしていることがある。

ツルの飛来である。最初の出会いは衝撃的というか感動的だった。多いときは200羽、300羽の群れが独特の鳴き声を出し合いながら舞い降りてくるのである。しかも原の辻遺跡のなかに、本当に感動そのものなのである。このツルの種類は胴体が灰色のナベヅル、越冬のため遠くシベリヤからやってきて、鹿児島県出水平野で過ごすのであるが、壱岐には北帰行のため立ち寄り羽を休めるのである。遺跡の位置する一帯は深江鶴亀触（ふかえつるきふれ）と呼ばれ、県下第２の広さの平野であるが、なんといっても「鶴は千年亀は万年」のとおりおめでたい名前なのである。いろんなところで話をするとき、必ず遺跡のなかでたわむれるツルの写真を紹介する。しかも、今は遺跡の復元建物や埋蔵文化財センター・一支国博物館をバックにした情景は捨てがたいものがある。ひょっとしたら、二千年前の一支国弥生人も同じような光景を目の当たりにしていたと思うと、さらにロマンがひろがる。

■安楽　勉（64歳）
平成16年からセンターの前身である原の辻遺跡調査事務所長を務めた。壱岐での勤務は合わせて13年目になる。壱岐島内踏破を目指し、徒歩でくまなく自然散策するのが趣味。宮崎県出身

東アジア考古学研究室から

原の辻遺跡で中国の土器を確認

文化財保護主事　古澤　義久

原の辻遺跡出土の土器のうち、現在の平壌市を中心とする楽浪郡のものとしてこれまで考えられていた土器の中にどうも、もっと遠い中国のものではないかと考えられる土器があることがわかってきました。船着き場のあった不條（ふじょう）地区の昔の河川の跡から出土した土器（宮崎・杉原2000）がそれで、胴部上部に２～３条の沈線（ちんせん）が２段めぐり、胴中部には１～２本の縄を押し当てた痕跡が残り、胴下部には縄を巻いた道具で叩いた痕跡が横方向に残っています（図１）。韓国・嶺南大学校の鄭仁盛（チョンインソン）教授が、遼東半島の大連市牧羊城附近の貝墓（原田・駒井1931）からこの土器の類例（図２）が出土していることを示し、最初にこの土器が遼東地域（遼寧省の遼河より東側の地域）の土器だと指摘しました（鄭仁盛2003）。また、大阪歴史博物館の寺井誠さんは中国の山東省の前漢から王莽新（おうもうしん）の土器に類例があることを指摘しています（寺井2007）。

（胴下半部の拡大写真）

図１　原の辻遺跡不條地区出土遼東系土器

図２　遼寧省大連市牧羊城附近貝墓出土土器

図３　遼寧省大連市大藩家村貝墓出土土器

そこで、さらにこの土器の類例を探してみますと原の辻の土器と同様に、胴中部に１条縄を押し当て、胴下半部に縄目のタタキのある土器が大連市の大藩家村貝墓（劉俊勇1995）や劉家屯811号貝墓（劉俊勇・劉金友1995）で発見されていることがわかりました（図３）。いずれも前漢代の資料です。これらの類例がみつかった遺構として貝墓（かいぼ）が多いのは注目すべき点です。貝墓とは遺体を埋める穴や木で造った棺を納める部屋にカキなどの貝殻で充填した墓で、遼東半島や山東半島の北岸に特徴的に分布します（白雲翔1998）。貝墓からわかるように遼東半島と山東半島には交流があって同種の土器が両地域にまたがって分布していることから、鄭仁盛教授の遼東説も寺井さんの山東省を含めて考える説も、双方、可能性があるものと思われます（古澤2010）。つまり、この土器はこれまで考えていた楽浪郡ではなく、遼東地域か山東省附近の前漢代の土器ではないかと考えられます。楽浪郡よりも中国の中心地に近い遼東地域を中心とする地域の土器が原の辻遺跡で出土していることから、原の辻の人々と中国との交流が深かったものと評価することができます。

引用文献

寺井誠2007「日本列島出土楽浪系土器についての基礎的研究」『古文化談叢』56
原田淑人・駒井和愛1931『牧羊城』東方考古学叢刊第２冊
古澤義久2010「壱岐における韓半島系土器の様相」『日本出土の朝鮮半島系土器の再検討』第59回埋蔵文化財研究集会発表要旨集
宮崎貴夫・杉原敦史2000『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第19集
鄭仁盛2003「弁韓・加耶의 対外交渉」『伽耶　考古学의 새로운 照明』
白雲翔1998「漢代積貝墓研究」『劉敦愿先生紀念文集』
劉俊勇1995「遼寧大連大藩家村西漢墓」『考古』1995-７
劉俊勇・劉金友1995「遼寧大連劉家屯西漢貝墓」『博物館研究』1995-３

■古澤義久（29歳）
平成19年４月、長崎県教育庁文化財保護主事として採用。現在、センター内の東アジア考古学研究室に勤務。
専門は東北アジアの新石器時代だが、最近は中国貨幣も研究。昨年11月に父親になった。埼玉県出身

県内の遺跡発掘情報

・平成22年７月～平成23年１月までに長崎県内で県及び市町が発掘調査・試掘・範囲確認調査を実施した遺跡です（※印は県が調査）。

所在地	遺　跡　名
長崎市	式見Ａ遺跡【縄文・弥生】、史跡出島和蘭商館跡【近世】、長崎西役所跡【近世】※、桜町遺跡【近世】、北渓井坑跡【近代】
佐世保市	江上支所裏遺跡【中世・近世】、大刀洗遺跡【中世・近世】、三川内西窯跡【近世】
平戸市	緑ヶ丘遺跡【縄文・古墳】
松浦市	今福遺跡【縄文・弥生・古墳】※
島原市	森岳城跡【近世】
諫早市	尾和谷城跡【中世】※
大村市	冷泉遺跡【中世】
壱岐市	松崎遺跡【縄文】、原の辻遺跡【弥生】※、田ノ上遺跡【弥生】
雲仙市	小路遺跡【中世・近世】
南島原市	下大久保遺跡【縄文】、山ノ寺梶木遺跡【縄文】、大平古墳【古墳】、日野江城跡【中世・近世】、日野江町遺跡（仮称）【近世】
波佐見町	中尾上登窯跡（史跡肥前波佐見陶磁器窯跡）【近世】
小値賀町	神方遺跡【弥生・古墳・中世】